

漂泊する身体，彷徨^{さまよ}うところ

～まなざしの中の故郷～

鈴木晃志郎

日本の全人口の約一割が住んでいる東京。実のところその約半数は、他県から流入してきた地方出身者なのだとか。先ごろ、大都市に集中する税収の格差是正のため政府が構想中の「ふるさと納税」について、共同通信社が彼ら地方出身者に世論調査を実施したところ、何と賛成票を投じたのは7割以上。「ああ、地方出身者は東京でバリバリ活躍していても、心のどこかには故郷への想いが脈々と流れているのだなあ…」などと、妙に感心したものです。

本日の演奏会でとりあげられる4名の作曲家は、生まれた国や時代は疎か、その人生模様まで、一見するとまるっきりバラバラに見えます。しかし、ひとたびその背景に目を移すと、彼らのパーソナルな人生行路の奥に、郷土と心との距離感をめぐる二本の糸で結び合わされた二組の、奇妙な伏線が見え隠れしてくるのです。

一つ目の糸：漂泊する身体

ジュゼッペ・マリア・カンビーニ(Giuseppe Maria Gioacchino Cambini)は、1746年2月13日リボルノに生まれ、1825年12月29日パリ近郊のビセートル(Bicêtre)にて世を去ったイタリア人作曲家です。1763年から1766年に掛けボローニャへ出て、ヴァイオリンをフィリッポ・マンフレディ、楽典をジョヴァンニ・パティスタ・マルティーニに師事。ナポリで歌劇を一作書くも成功は果たせず、失意の彼は許嫁とともに故郷へ戻る船旅に出ます。しかし、彼の人生はここから大きく変わりました。その船は海賊の餌食となり、彼はフィアンセと生き別れのまま奴隷としてエジプト北西部のバルバリー地方へ売り飛ばされたのでした。

幸運にも彼は、ここでヴェネチア出身の商人によって助け出され、自由の身になります。その商人の計らいで1770年にパリへ出たカンビーニは、権威ある作曲家ゴセック(François-Joseph Gossec)の知遇を得たのを機に、自作の交響曲や舞台作品の幾つかを、彼の主催する演奏会【コンセール・スピリチュエル⁽¹⁾】で上演してもらうことができました。彼はたちまち当代きっての人気作曲家となり、その後20年に渡ってパリへ留まって膨大な量の作品を作曲。交響曲60、弦楽四重奏曲144、協奏的交響曲29、協奏曲7のほか、400近い器楽・室内楽作品、15の愛国的な讃歌、20を超える舞台作品を残しました。当時は発表する端から売れに売れ、時には別人の書いた曲まで彼の名前で出版されたほどだったといえますから、その人気が伺い知れます。

フランス革命期に入ると、彼は革命を礼讃する愛国的な讃歌を書くようになり、1788年から1791年まではボージョレ歌劇場で、1791年から1794年まではルヴォワ劇場で、それぞれ指揮者を務めたほか、1804

(1) フランスで活躍したベルギー出身の作曲家・指揮者のフランソワ＝ジョセフ・ゴセック(1734-1829)が、1770年に「コンセール・デ・ザマトゥール Concert des Amateurs」(愛好家のための合奏団)を設立し、それを母体として1773年に同名の演奏会を再編成したのが「コンセール・スピリチュエル Concert Spirituel」と題する連続演奏会であった。彼は自作の交響曲だけでなく、同時代人の多くを紹介。とりわけハイドンの作品は精力的に採り上げ、パリでのハイドンの名声獲得に多大な貢献を果たした。

年にはライブツィヒ A.M.Z.誌に批評家として投稿し、1810年から1811年にはタブレット・ド・ポリムニー誌の共同編集長にもなるなど、作曲以外での活動が多くを占めるようになりました。しかし、皮肉にもこのことが、流行作家だった彼の名前を人々の記憶から急速に忘れさせる結果をもたらすことになってしまったのでした。パリの泡沫に生きた彼の最後の10年間は救貧院暮らしを余儀なくされるほど窮乏をきわめ、かつて檜舞台で栄華を極めた人物にはあまりにも似つかわしくない、惨めなものでした。

いっぽう、アーネスト・ジョン・モーラン (Ernest John Moeran)は1894年12月31日ノーフォーク県ヘストンに生まれた英国近代の作曲家です。生後まもなく、彼の一家は同じノーフォーク地方の沼沢地帯バクトンへ転居。ここで彼は多感な少年時代を過ごしながらか、独学でヴァイオリンとピアノを習得しました。アッピンガム校へ進んだのち、いったんは首都ロンドンへと上京し、1913年王立音楽学校へ進学。教育者として高名なチャールス・スタンフォードに作曲法とピアノを師事します。しかし時代は第一次大戦へ。彼は、学業半ばにして従軍します。そして、ノーフォーク連隊第六大隊の兵卒として従軍中の1917年5月、榴散弾によって頭部に重い傷を負ってしまいました。手術で一命は取り留めたものの、その後生涯に渡って神経症に悩まされることとなります。また彼は1925年頃、当時懇意にしていたピーター・ウォーロックらを通じて酒を覚え、これが頭部の傷とともに、彼の後半生へ深い影を落とすことになりました。

しかし、1920年代に帰還し、障害者年金の支給を受けた彼には、もう一つこの時期に大きな変化がありました。復学当時、王立音楽学校で教鞭を執っていたジョン・アイアランドの存在です。彼の影響からでしょう。この頃から彼は、生地ノーフォークの民謡を収集するようになりました。次いで、自身に流れるアイルランドの血筋を意識するようになると、彼はアイルランド南西部沿岸の小都市ケンメアに居を構え、その後の人生の大半をここで過ごすようになります。1931年に書かれた弦楽三重奏曲も、この時期以降の作品。こののち彼の人生は、自らの依って立つルーツを見出した光の側面と、神経症やアルコール依存で精神的な安定を失う影の側面とが危うく交錯する中で過ぎてゆくことになるのです。1950年12月1日、折からの嵐の中、棧橋から海へと転落する彼が目撃されました。溺死体となって発見された彼の死因は、心臓発作から来る脳内出血でした。

時代も国も違う二人の人生。しかし、一度は勉学のため故郷を離れた彼らのその後の足取りは、故郷との距離感において見事なまでに好対照です。封建的な君主政治を否定し、自由・平等・同胞愛を旨とする近代市民主義をうち立てた当時のフランスへののぼり、その最も華やかな表舞台で泡沫の夢に酔ったカンピーニ。その音楽が醸し出す、典雅な宮廷情緒と華やかなサロンの香りは、コスモポリタンだった彼の生き様を鮮やかに反映しています。いっぽう、カンピーニとどこことなく似通った形式感を持ちながらも、遙かに田園詩調の朴訥な耳あたりと、不意の転調に刻まれる危うい情緒の陰影を秘めたモーランの三重奏曲は、郷土の自然に包まれた等身大の生活の中に、光と影のリアリズムを見出した彼の人生を色濃く反映しているといえましょう。

二つ目の糸：彷徨うところ

レックス・ファン・デルデン (Lex Van Delden)、本名アレクサンダー・ズワープ (Alexander Zwaap)は、1919年9月10日アムステルダムに生まれました。幼少期からピアノを習い、程なく名手として知られたコル・デ・グロート (Cor de Groot)から指導を受けるようになった彼でしたが、大病を患って練習を長期

に渡って中断せざるを得なくなり、療養中の11才の頃にマルタ・ズワラの詩に触発されたのを機に作曲を始めます。作曲家としての訓練を正規に受けたことはなく、表現主義の影響を受けてはいるもののほぼ独学。1938年にアムステルダム大学へ進み薬学を専攻。将来の夢は神経外科医でした。そのいっぽう作曲家としても腕を上げ、1940年には在学中にしてソプラノ、フルートと弦楽三重奏のための『恋人』でプロとしてのデビューを飾ります。

彼の運命が大きく変わったのは、奇しくも彼の作曲家デビューと同じ年にオランダへと侵攻してきたナチス・ドイツによってでした。そう、彼はユダヤ人だったのです。1942年に退学を余儀なくされた彼は、ランプの破裂で左目を負傷し、医者ももうち砕かれます。さらには、家族のほぼ全員をホロコーストで奪われ、ついに学生たちによるレジスタンス運動へと身を投じるのでした。デルデンの名は、このレジスタンス活動中に用いていた通名で、のち1953年公的に改名を認められたもの。いわば彼の抵抗の証でもありました。

そんな彼を、政治的な思惑含みで最初に評価したのはアメリカでした。終戦後、彼は直ちに米国大統領と連合軍の総司令官から勲章を受けます。また音楽家としての彼が最初に評価されたのは、オマル・ハイヤームに着想した1948年の『9つの四行詩』(アムステルダム市音楽賞受賞)でしたが、これに続くのは、ハーブ協奏曲と即興曲に対して、1953年と1956年の二度に渡って最優秀賞を授与した北カリフォルニア・ハーピスト協会です。その後も彼は、オランダ大洪水を題材にした管弦楽曲『イン・メモリアム』や、奴隷制への批判を込めたオラトリオ『自由の鳥』、戦争を糾弾するメッセージが込められた合唱曲『戦時の歌』など、社会派の題材を選んで作曲。また1947年以降、かつての地下新聞を前進とする日刊紙【ヘット・パロール(Het Parool)】の音楽部門の編集委員を1982年まで務めるなど、絶えず社会へ批判的な眼差しを向けていました。

しかしながら、1972年には騎士称号を受け、1982年にはアムステルダム市自由賞。オランダ作曲家協会(GeNeCo)の会長やオランダ上演権協会(Buma/Stemra)、オランダ国際音楽評議会委員などを歴任。1988年7月1日に世を去るまで生涯、故郷のアムステルダムを去ることはなく、のちのちまで同地を代表するオーケストラとして名高い王立コンサートヘボウ管弦楽団と蜜月関係にありました。委嘱作も数多く作曲。ジョージ・セルやシャルル・ミュンシュ、エドゥアルド・ファン・ベイヌムらそうそうたる指揮者がコンサートヘボウ管を指揮し、それらを演奏していたことは、彼と同楽団の深い関係を裏付けるものでしょう。彼は、郷土を愛し、愛された作曲家でもありました。

身体では故郷の大地に根を下ろしながら、自らの身体を流れる血筋のゆえに、自らの属する社会とはこころの距離を置かずにはいらなかったデルデン。その二律背反的な心模様は、ホロコーストに苛まれた【頽廃音楽家】のそれを思わせる不穏な音運びと仰々しい蠢動が渦巻く、1957年作曲のこの四重奏曲からも、確かに聴き取ることができましよう。

いっぽう、2007年に没後50周年を迎えたジャン・シベリウス(Johan Julius Christian Sibelius)は、1865年12月8日ハメーンリンナに生まれ、1957年9月20日、ヤルヴェンパーで世を去ったフィンランド近代を代表する大作曲家です。本演奏会には場違いなほど有名な彼の名前を、一度くらいは耳にした人も多いことでしょう。彼について述べる時、その背後にあったフィンランド民族主義の台頭を語らないわけにはいきません。1155年、スウェーデンの北方十字軍に征服されたフィンランドが、その名をようやく歴史上に覗かせたのは1581年、スウェーデンを宗主国とするフィンランド公国の誕生からでした。

その後、スウェーデンとロシアの2つの大国に挟まれたフィンランドは、最終的に1808年から翌年にかけての戦争でロシアへと併合されます。当初ロシアはフィンランドを大公国とし、自治権を承認。スウェーデン語のみが公用語であったフィンランド自治大公国で、フィンランド語が公用語になったのは、ロシア統治時代に入って以降、ようやく1863年に入ってからのことでした。シベリウスが生まれた1865年は、その僅か2年後です。

しかし、1894年に即位した大公ニコライ2世の治世に入ると、ロシアの統治政策は大きく変化を遂げるようになります。彼は1899年2月に【二月宣言】を発令。フィンランドの自治権を奪って本格的な弾圧と同化政策を始めました。シベリウスが出世作となった大作『クッレルヴォ交響曲』の初演により、本格的な楽壇デビューを果たしたのは1892年。彼が作曲家として足場を固めた時期と、ロシアの圧政が始まった時期はほぼ重なっていました。

ロシアへの反発から愛国独立運動が高まるなか、追い風となったのは第一次大戦でした。旧態然としたロシアの軍隊では、ドイツの近代武装に太刀打ちできず、混乱の末に2月革命と10月革命が勃発。ロシアの帝政は一気に崩壊。この混乱に乗じてフィンランドは1917年12月6日に独立を宣言。1919年には歴史上初めて完全な独立国となるのでした。彼自身の音楽的な才覚もさることながら、シベリウスの名を抜き出したものにした背景には、こうした時代の悪戯もまた、少なからずあったのです。

確かに出世作となった大作『クッレルヴォ交響曲』を含め、彼の作品の多くはフィンランドの独立運動に大きな影響を与えた民族叙事詩『カレワラ』に基づいて着想されましたし、代表作の一つともいえる交響詩『フィンランディア』が、フィンランドの独立精神を鼓舞する役割を担ったことも良く知られています。また、彼自身も、若かりし頃にベルリンやウィーンへ留学こそしたものの、ドイツ・ロマン派の音楽性に失望して「フィンランド固有の音楽」を目指すようになり、この創作態度が初期のシベリウスを、愛国路線の作曲家として祭り上げる風潮へとつながったのも確かです。

しかし、実際に彼がいわゆる「愛国主義のロマンティスト」であったのは、交響曲第1番、第2番辺りまでのことでした。彼の出自は、もともと上流階級の多いスウェーデン語系です。彼が愛国的な題材に目を向けるようになった時期と、彼がフィンランド屈指の名将軍の娘アイノ・ヤルネフェルトと結婚した時期が近接していることから、その「愛国主義」は、政治的思惑よりも個人的関心のほうにより強く依拠しているのではないかと考える人も少なくありません。

耳疾の治療と社交好きの性格から来る心身の墮落を正すため、彼は1904年にヘルシンキを離れ、田園地帯のヤルヴェンパーに移り住みます。これを反映してか、以降に書かれた作品は徐々に構成が簡潔になり、書法は清明なものとなってゆきました。愛国主義で単純に括れぬものが、彼の中には確かに存在するのです。

また彼は後年も、『カレワラ』を始めとする民族的な題材を用いてはいるものの、フィンランドの民謡を明示的に用いて書かれたのは、わずかに1篇。『6つのフィンランド民謡』しか残されていないことを忘れてはなりません。

愛国主義のけばけばしい喧噪が周囲を満たしてゆく中で、スウェーデン語の家系に育ったシベリウスがいかなる想いを抱いていたのか。死後50年を経た今となっては知る由もありません。しかし私たちが、彼を型どおりの愛国者と見なす思考を一旦停止し、ヴィルトゥの紡ぎ出す三弦の旋律にただ耳を傾けるとき、身体は故郷の大地にしっかりと根を下ろしながらも、偏狭な愛国主義の遙か遠くに視線を送っていた彼の“インターナショナルな”音楽が、また違った音色で心へと届くのではないのでしょうか。